

令和5年度

福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん



弥富市社会福祉協議会



この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。

ごあいさつ

今年度も、福祉体験作文コンクールに市内各校より多数の作文をお寄せいただき、誠にありがとうございます。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきましたので、お手にとってご覧ください。

児童・生徒ならではの視点や純粋さを感じる数々の作文があり、その思慮深い考えや行動には胸を打たれるものがあります。

この数年の間、児童・生徒の皆様も制限の多い生活をされていたことと思います。互いに距離をとっての授業やマスクの着用、体験学習における制限などがあったことでしょう。そのような制限があった時期から、今の情勢への遷移を受けてもなお、相手のことを考える『思いやり』の心は不変です。人の心は変わらず温かいものであると再認識することのできる福祉体験作文は、やはり良いものだと感じます。

今回の作文にも共通して『相手を思いやる心』が見受けられました。相手のことを意識して、「自分ならこう思うけれど、相手はどういうふうに思うかな？」とか「自分がこういう行動をとったら相手は喜ぶんじゃないかな？」など、随所に『相手を思いやる心』を垣

間見ることができました。『相手を思いやる心』が弥富市の中で醸成されていることを確認することができ、とてもうれしく思います。

この福祉体験作文コンクールも今年で8回目を迎えることができました。弥富市のさらなる福祉の発展につながるよう期待を込めて、今後も継続して実施してまいりたいと思います。

心に『思いやり』の火を灯し、人と人がつながり、助け合う、『地域共生社会』の実現に向けて本会としても努めてまいりますので、引き続き皆様方のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、作品をご応募いただいた児童・生徒の皆様、指導にあられた先生方やご家族の皆様にご敬意を表しますとともに深く感謝を申し上げます。

令和五年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 八木春美

令和五年度「福祉体験作文コンクール」作文集

- ・最優秀賞 乗りこえた先には
弥富中学校 二年 村上琴音
- ・優秀賞 ぼくの耳
白鳥小学校 五年 松崎圭佑
- ・秀逸 「福祉への考え方」
十四山西部小学校 五年 木全潤哉
- ・入選 幸せの扉
海翔高等学校 一年 楠井果稀
- ・入選 誰もが暮らしやすいまち作りを目指して
弥富北中学校 一年 平下友誠
- ・入選 ボランティアの正体
十四山中学校 三年 廣辻朔人
- ・佳作 ボランティア活動を体験して
十四山中学校 三年 有田愛桜
- ・佳作 私ができること
桜小学校 五年 伊藤優衣
- ・佳作 「量より質」
日の出小学校 六年 橋野凜佳子
- ・佳作 見えるしょうがい見えないしょうがい
十四山東部小学校 四年 木村朱杏

☆最優秀賞☆

乗りこえた先には

弥富中学校 二年 村上 琴音

私の弟は生まれつき心臓病を患っている。そんな弟は無事に、今年で七歳の小学二年生になった。重い物が持てないのでランドセルが背負えなかったり、皆と同じように班で歩いて通学することはできない。けれど、毎日

「今日は新しい歌を覚えたんだよ。」

「先生にいっぱい褒められたよ。」

と、楽しそうに学校での出来事を話してくれる姿を見ているととても嬉しい気持ちになる。これまで、たくさん大きな壁にぶつかってきたことを私は知っているから。

弟は、生まれてすぐに心臓に異常が見つかり、救急車で大病院へと運ばれた。約半日におよぶ大きな手術を受け、危険な状態だったがなんとか命をつないでもらった。それからも成長するごとに何度も手術をし、入院、退院を繰り返してきた。弱音ひとつ吐かずに。また、弟は人と話しをすることが何よりも好きだ。入院中、同じ病室になった子には必ず自分から話しかけに行くくらいに。長い入院生活で幼稚園や保育園に通

えず悲しい思いをしただろう。その分、小学校ではたくさん楽しんでほしいと家族皆が思っていた。

小学校に入る前、父と母は弟を「特別支援学校」に入れるか、普通学校の「特別支援学級」に入れるかとても悩んだという。弟は、皆のように体を動かすことができないし、周りの子よりも少し学習スピードが遅い。普通学校は特別支援学校と比べて障害のある子への設備があまり整っていなかったり、他の子とのトラブルが起りやすかったりする。それなら絶対に支援学校の方がいいのではないかと私は思ったが、両親は、最終的に普通学校へ通わせるという決断をした。学校側は、弟のためにクラスを作ってくれたり、支援員さんをつけたりしてくれたそう。けれどまだ、両親が普通学校に通わせようと決めた理由はわからないままだった。

私は中学校が早帰りの日に、弟の様子を見に行くことにした。教室をのぞいて見ると、たくさん友達に囲まれて楽しそうに話している弟の姿を見つけた。そのまま教室を見つめていると、弟のまわりにいた一人の女の子が私の姿に気づいて手を振ってくれた。すぐに弟も私に気づき笑顔で手を振った。この笑顔を見た瞬間私は、はっとした。あの時の両親の選択はこのためだったんだ、間違っていないかったんだなあと。設備が整っていないくても、トラブルが起るかもしれないくても、一番大切なのは自分が「楽しめるかどうか」だ

ってことをその笑顔が気づかせてくれた。私の両親は設備よりも弟の「個性」を尊重したのだ。設備がどうでもいいわけではないが、優しく強い心を持っている弟のまわりには、優しい人達で溢れている。ずっとそばで見守ってくれている支援員さん、工夫して授業をしてくれる先生達、移動教室の時に荷物を持つのを手伝ってくれる友達、毎日話しかけてくれる友達。そんな支えてくれる人達のおかげで弟は、毎日楽しく学校生活が送れている。本当にありがとう。ここには弟の最高の居場所が作られていた。

一方で辛い事だっただくさんある。弟は長時間歩くと心臓に負担がかかったり、体調が悪くなったりしてしまうので出かける時は基本的に車いすに乗っている。また、行ける場所も少し限られてくるので私たちにとっては貴重な外出だった。私が車いすを押して歩いているとまわりからジロジロ見られていたり、小声で何かを言われたり、指をさされることだっただけであつた。車いすに座っている弟から見ると、上から覗き込まれているようでとても怖いそう。たしかに、車いすは少し珍しいかもしれない。けれど、気になる事や知りたいことがあるのなら直接聞いてほしいな。少し勇気が必要だが、私は何度でも答えるから。そして、弟がこの壁を乗り越えることができるのなら。

別に、無理して声をかけろと言っているわけではない。もちろん嬉しい事だっただくさんある。エレベーター

ターで並んでいたら前の人が「先、どうぞ。」と譲ってくれたり、デコボコな道で車いすのタイヤが道路のみぞにはまってしまったときに「大丈夫ですか。」と助けてくれたり。胸がポカポカと温かい気持ちになる。ただ弟は人より少し心臓が弱いだけで、皆と同じ人間だから。弟の戦いはまだまだ続いてゆく。辛い事、嬉しい事、これから先もたくさんあるだろう。でも、大丈夫。私の弟は強いから。どんな事だっただけ乗りこえるから。温かく見守っていてほしい。乗りこえた先には、また、楽しい未来が待っているから。



☆優秀賞

ぼくの耳

白鳥小学校 五年 松崎 圭佑

ぼくは中等度難聴で補聴器をつけています。ふつうに聞こえているように見えますが、本当は聞きとりにくいことも多いです。補聴器をつけないと、小さい声やぼそぼそ話す声は聞こえにくく、グループでの話し合いは、補聴器をつけていても聞きとりづらいです。周りがざわざわしていると、音全部が交ざりあって、色でいうなら黒色のようなイメージです。その中で、ぼくが学校生活を送るためにはいろいろと工夫が必要です。

第一に、先生が話していることをゆうせんに聞こうと心がけています。そのためには、しゃべっている人に集中することが大事だと思っています。なので、だれかが話しているときに、静かにしてくれるのほとてもありがたいです。

第二に、最近使い始めたロジャーです。ロジャーを使うと、先生の声が直接ぼくにとどくのでとても聞きとりやすくなります。小さい音や、さわがしい中での会話も聞こえるようになります。ロジャーのおかげで、苦手なグループ活動もやりやすくなりました。

もちろん、ぼくだけの工夫で成り立っているわけではありません。先生や友達は、ぼくが聞こえやすいように話してくれるし、聞きとりにくいことがあればみんなが教えてくれます。話すときは、ぼくのほうを向いて話してくれるので会話がしやすいです。ぼくが聞きとれなくて気づけていないときに、気づいて教えてくれる友達もいます。補聴器やロジャーがぼくにとつて大切なのは当たり前だけど、こうやって助けてくれる友達がいることはとてもうれし、ありがたいことだと思います。でも、自分でできることは、できるだけ自分でがんばりたいという気持ちもあります。こまったら、だれかが助けてくれると分かっていることは、ぼくにとつてとても心づよいです。

これからも大変な事がたくさんあると思うけど、ぼくには味方でいてくれる家族や先生や友達がいいます。自信を持って、ぼくなりにこれからもがんばっていきたいと思います。



◎秀逸

「福祉への考え方」

十四山西部小学校 五年 木全 潤哉

ぼくは、今年の福祉実践教室で高齢者疑似体験、妊婦さんの体験、目が見えない視覚障害者の体験、耳の聞こえない聴覚障害者の体験の四つをさせて頂きました。

ぼくは、元々、障害ということを誰かに助けてもらわないといけないような特別な接し方が必要なことを指すものだと思います。ですが、ぼくは大きな勘違いをしていました。実際に福祉実践教室の授業を受けて、たとえばどんな障害をもっていたとしても、自分で動ける人もたくさんいて、だれもが自分と変わらない一人の人間であるということに気づきました。

高齢者疑似体験では、手首足首に重りをつけて歩いたり、ゴーグルに色の付いたフィルムをつけて色の付いた文字を読み何色が見えにくいか感じたり、防音ヘッドホンをつけて会話をするなど色々な体験をしました。この体験では、歳を取ると、とても不自由な事がふえるのだなと感じました。

妊婦さんの体験では、体験セットを身に着けた状態で学校の廊下を歩き、さらに階段の上り下りも体験し

ました。廊下を歩く際は、いつもより重みを感じる程度の体感でした。ですが、階段の上り下りになると急げきに足へのふたんが大きくなりました。この体験では、とても妊婦さんの苦労と大変さを感じました。

視覚障害者の体験では、アイマスクをつけて校内を二人ペアで歩きました。ぼくは、実際にアイマスクをつけ校内を歩いた際に、すぐく付きその人の案内・説明が重要だなと感じました。でも、自分が案内・説明役になるとすぐくむずかしかったです。今回の体験は、校内だったので案内の際に今、何室の前だよと言えば説明することが出来たのですが、もしもこれが外出先の知らない場所だったらと考えると案内は、とてもむずかしいなと感じ、さらにもしも本当に目が見えないと考えるとやはりきょうふを覚えました。目が見えないというきょうふ心を改めて感じる機会となりました。

聴覚障害者の体験では、耳栓をつけて会話をしてみたり、身ぶり手ぶりをしたりしました。実際に、会話をしてみても耳栓での体験だったので少し音・声が聞こえましたが、もし本当に何も聞こえなくなってしまうと考えるといつもの会話がとても大変だなと感じました。

ぼくが、今回の福祉実践教室で特に心に残った体験は、高齢者疑似体験です。なぜならぼくには、こしの悪いおじいちゃんがあったからです。私生活では、こし

にコルセットをつけて長い間生活をしていました。このことを踏まえて、今回ぼくが体験したもののだけでもすごく大変になるなど感じましたが、おじいちゃんのことを思うとどれだけ大変だったのかとすごく考えてしまいました。

ぼくは、このように今年の福祉実践教室で色々なことを学びました。たとえどんな障害をもっていたとしても、自分と変わらない一人の人間だということ、歳を取るにつれての不自由さ、妊婦さんの感じる大変さ、目の見えないうきようふ心、耳が聞こえないという不便さなどを知りました。また、今自分が日常生活で当たり前だと思っていることが当たり前でなくなるかもしれないことも学びました。

このように、今回実際に体験してどのようにサポートをしてほしいか体験した側として、もしも困っている人を見かけたら今回の授業を生かして、相手方の役に立てるように頑張りたいなと思いました。



〇入 選

幸せの扉

海翔高等学校 一年 楠井 果稀

私は今、介護福祉士を目指し、高校福祉科で学んでいます。介護福祉士を目指した理由は、人の役に立ちたい、自分が助けることでその人の笑顔を見たいと思ったからです。福祉科に入学し、福祉に関することを学ぶうちに高齢者、認知症の方・障害者・麻痺のある方の生活の手助けをしたいと強く思うようになりました。

私たち福祉科は三年間で五十二日間、実際の介護現場で実習を行います。初めての実習は通所介護施設実習です。実習に行く前の通所介護のイメージは、利用者の方と職員の方が和気あいあい楽しく過ごしていると思っていました。しかし、実際の介護現場はそのイメージとは異なることが多いことが分かりました。また、学ぶことも多くありました。

「〇〇さん、体温と血圧測りますね、どこか体調悪いところありますか？」

「とても元気だよ、今日もよろしくね。」
こんな会話からデイサービスの一日は始まります。その後、職員間で利用者の方の体調や今日の状態などの情報共有をします。入浴介助の際にも利用者の方の安

心と安全を守るために情報共有などの工夫がされていることなど、職員の方から多くのことを学ぶことができました。また、職員の方だけでなく、コミュニケーションを通して、利用者の方からも多くのことを学ばせていただきました。

利用者の方とのコミュニケーションは初めはなかなか笑顔を見ることができず、悩んでいました。しかし、ハート型の風船を用いながら話をしたところ、次第にお互い笑顔になることができ、安心してコミュニケーションをとることができました。

ある一人の利用者の方が戦時中の話をしてくださいました。

「お姉さん、よく聞いてね、戦争中のことを教えるよ。」

「戦争中はね、まともに食えることができない、服も同じものを使い古す、住む家も戦火で失い、病気の治療もなかなかしてもらえない。笑う日なんてない苦しい毎日だったんだよ。」

その苦しい中でも配給がある日は涙を流しながら感謝して、治療してもらえらなるとなったら、神様にも感謝したとおっしゃっていました。

「今生きていることは支えてくれた人からの無償の愛であり、死ぬその日まで感謝を忘れずに生きたい。」と私に強い思いを込めて教えてくださいました。また、教師をされていた他の利用者の方は、よく喧嘩をする

生徒には、

「暴力をふるうんじゃない、しっかり話し合いをして解決をしなさい。」

といっていたそうです。その考え方は今でも変わらず、暴力的な人には話し合いを促しているとのことでした。

私はこの二人の方の話を聞き、衣食住が揃っていることだけでも「感謝」であるが、その以上に健康で笑っていること、自分が幸せだと感じることに「感謝」であること、自分が生きていくこと自体が「愛」であると気づかされました。友達や家族と喧嘩をしてもやり直しができるのは、「感謝」の気持ちや無償の「愛」があるからだと、利用者のお二人から教えてもらったような気がしました。利用者の方とコミュニケーションをとることで自分では見えていない、知らない世界、価値観をすることができました。私は介護職はとても魅力的な職業だと思います。それは、利用者の方の喜ぶ姿や笑顔をみることができたり、人生の最後までその方を支援することができたりするからです。また、介護職は、利用者の方を気遣い支援するだけでなく、利用者の方から大切なことや人生を教えることも魅力だと思えます。さらに、利用者の方一人ひとりに寄りそった介護をすること、利用者の方と信頼関係を構築していくということも魅力だと思いました。

私は高齢者、認知症の方、障害者、麻痺のある方、

どんな方でもその方らしく自由な人生を歩んでいけるよう、幸せの扉と一緒に開けて、最後の日まで伴走できる介護職になるために、これからも専門性を身につけ、人間としても成長していけるよう、日々努力を重ねていきたいと思えます。



〇入 選

誰もが暮らしやすいまち作りを目指して

弥富北中学校 一年 平下 友誠

僕には、もうすぐ100歳になる曾祖母がいます。僕が小学校低学年の頃は、よく曾祖母が住む家に遊びに行っていたくさんお話をしていました。でも時の流れとともにだんだんと曾祖母の足腰が弱くなってきて、移動するにも周りの親族の支えがないと歩行が困難になってきています。先日、久しぶりに曾祖母の住む家に遊びに行きました。その時、曾祖母と話していたのですが曾祖母の口から出た「こんな身体になってしま

って申し訳ない」という言葉を聞いた時に、何か僕の心に突き刺さるものがありました。

僕は、小学生の時の授業で「車いす体験」をしたことがあります。車いすに実際に乗ってみて乗ることが意外に大変なのを知る内容でした。まずは一人で車いすに乗り、自分の手で車輪を回す体験をしました。自分の体重分の重さもある車いすを両手でコントロールすることはとても難しく、少ししか動かしていないのに両腕がパンパンになり見た目以上に力があることを思い知らされました。次に、友達に補助をしてもらいながら障がいを乗り越える体験をしました。実際の道路や建物では段差、砂利道、ぬかるみ等さまざまです。重心が前にかかりすぎると倒れそうになったりしてとても操縦が難しかったです。また、補助の方とのコミュニケーションが大事で、声掛けやお互いが信頼し合うことも大事なところでもあることを学びました。

五体満足で特に障がいを抱えていない僕にとっては、なんとなくの気持ちでその場の話を聞いていたが、その時の体験をふと思いつきました。というのは、その時にお話をしてくださった方から「車いすという便利な補助器具があるものの、日本ではまだまだ車いすで生活しにくい環境もある。」という現実の話聞いたからです。先ほどの曾祖母のことばはこういった身近な福祉環境がまだまだ整っていないことに対して、周囲のみんなに助けってもらってばっかで迷わくばかりかけ

てしまっているという気持ちがあったのだと思います。年を重ねることは全く悪いことではありません。本人に「迷わくをかけてしまう」とか「申し訳ない」という気持ちにさせてしまっているとはいけないと思います。改めて、僕の生活する環境を振り返って考えてみると、古い施設によつてはスロープやエレベーターがなかったり、道がきれいになつておらずデコボコしていつて通りにくかつたりする場所を見かけます。昔よりは改善されてきていると思いますが、まだまだ道のりは遠く、車いすを利用される方にとっては「大変だ」と思うことが多いです。

それを特に感じた出来事がありました。先日、母が足を骨折してしまったのです。病院から帰ってきた時には、ギプスをし松葉杖をついた状態となっていました。母は名古屋まで会社へ通うために電車に乗っていますが、最寄り駅は地下に改札口があるため階段を使つて降り、改札を通つたらまた階段を上らないといけない構造になっています。エレベーターがないのでバリアフリーの一環として地上に改札口を通過せずホームに行けるルートはありますが、インターホンで駅員へ声がけし、切符を見せてから柵が開くシステムとなつており時間と手間がかかつてしまします。母も「エレベーターがあつたら楽なのに」と言っていました。その通りだと思いました。

会社や自治体のお金の使い道はそれぞれ考え方があるので難しいかもしれませんが、これから先、高れい化や障がい者をはじめとする地域に暮らす人々の日常生活問題に①目を向け、②考え、やがては③その解決に向けて動くためのきっかけ作りの場をもつと社会が一丸となつて増やすべきだと思います。

僕自身も今回を機に、受け身になることなく、自ら進んで相手のことをよく知り、自分のことも知るといふ「様々な人が共に生きる」ことの大切さを周りの方々へきちんと言葉や行動で示せるように心がけていきたいと思ひました。そして、まずは曾祖母に対して「謝ることないよ、一緒にでかけて楽しもうね」と声をかけてたくさんの笑顔を見られるようにしたいです。



○ 入 選

ポランティアの正体

十四山中学校 三年 廣辻 朔人

僕には、ポランティアは善行というイメージがありました。調べてみても、日本でいうポランティアは自発性や主体性はあまり重要視されず、善い行いという考えを多くの人が持っていることがわかりました。

そこで僕は、実際にポランティア活動をしている僕のおばあちゃんに話をきいてみることにしました。すると、イメージとは違う、ポランティア活動を体験しなければわからない魅力を知ることができました。

もともと僕のおばあちゃんは趣味でオカリナという楽器を習っており、ステージなどで発表していました。しかしあるときに同じクラブの仲間からポランティアの演奏に誘われ、以前から興味を持っていたこともあって参加したそうです。そのポランティアサークルでは二か月に一回程度、老人ホームやデイサービスでギターやオカリナ、アコーディオンを使って演奏会をしています。もともとアコーディオンのみで演奏をしていましたが、アコーディオンメンバの年齢が八十代になってしまいギターやオカリナクラブの人たちに声がかかったというわけです。のちにアコーディオン奏者の方から「私たちだけだとポランティア活動は

終わっていたから、入ってきてくれてよかった。」と参加したおばあちゃんたちに話してくださったそうです。今では様々な楽器で高齢者を楽しませているこのサークルにもそんな危機的状況があり、それを乗り越えて現在も続いているのだと思うと、何か心に熱いものを感じられます。

老人ホームなどでは、高齢者たちが楽しめるように、彼らの知っている曲を十曲ほど選んで三十分から四十分ほど演奏するそうです。老人ホームの方々には歌詞カードを配り、それを見ながら一緒に口ずさんだりする人もいらつしやるし、目をつぶって聴いたり、なかには感動して涙を流している人もいると聞きました。また、何回か演奏会を開いているうちに改善点も見つけたそうです。曲の間奏が入ると歌い出しがわからなくなり歌えなくなる方がいらつしやつたのでメンバーの一人がカウントダウンなどして歌うタイミングを教えるという工夫がその一つです。このようにただ弾くだけではなく試行錯誤をしながら、もっと楽しんでもらえる方法を考えていることを知りました。

おばあちゃんは、「ポランティアとしてオカリナを吹いてあげているのではなく、オカリナを吹かせてもらっているんだよ。ステージに立って吹くよりも聞いてくれる人が喜んでくれる人がよく伝わり、演奏していても嬉し。少しでも役に立てたならありがたい。」と話してくれました。また「ポランティアの演奏

会は練習の励みにもなるし、自分にとってとてもいい場なんだよ。」とも言っていました。

ボランティアは人のためにする行いという僕の中の常識が覆り、自分の趣味や得意なことがボランティアという形で人の幸せになるんだということを知ることができました。

その思いを知り、僕は八十代のアコーディオン奏者の方がおばあちゃんたちに何気なく言ったであろう「入ってきてくれてよかった」という言葉が、ボランティアをする側、受ける側、両方の立場の何人もの幸せが途絶えなくてよかったという意味に感じられ、ぐっと胸を打たれました。ボランティアは善行であるというのとは間違ってないのかもしれませんが、何かできることはないかという人々の思いが少しずつ重なり、徐々に繋がりがゆっくり広がっていくことがボランティアの真の意義だと思いました。

最後におばあちゃんは、僕に向けて「この先朔人も得意なことやできること、今まで何気なく続けてきたことでもいいからどこかで披露してごらん。喜んでくれる人がいる。それは自分にとっても嬉しいことなんだよ。」と教えてくれました。それを聞き、自分の能力で誰かを喜ばせることができるなんてどれほど素敵なことだろうと僕は感じました。だから、ボランティアについてあまり難しく考えず、普段から家族や友達、地域の人に自分のできることをしていこうと思います。

そして、その行動はもうボランティア活動といつてよいと思います。

ボランティアという言葉の語源は、「自分から進んでくする」「喜んでくする」という意味があり、自発性が重要視されます。意味を取り違えて常識としてしまった僕たちは「ボランティア」の本当の意味をもう一度知り、考え直すことが必要です。そうすることで、ボランティアをもっと身近に感じ、特別なことではなく日常的に各々が自分のできることで自発的な行動が継続できるはずです。

【佳作】

ボランティア活動を体験して

十四山中学校 三年 有田 愛桜



私は、この夏休みに弥富市南デイサービスセンターというところでボランティア活動をしました。

デイサービスセンターとは、介護保険のサービスの一つで、利用者さんが日帰りで日常生活上のサービス

を受けたり、日常生活動作訓練や機能訓練を目的としたレクリエーションを行う場所です。また、介護者の気分転換、負担軽減を図る目的もあります。

私がこのような場所で活動したいと思った理由は、どんなことをしているのか知りたいという思いや高齢の方とどうやってコミュニケーションを取ればいいのか学びたいという思いがあったからです。

私は、弥富市南デイサービスセンターでボランティア活動をすると決まった時、自分にうまくできるかとても心配でした。実際、ボランティア活動をするのが初めてに等しい状態だったことも一つの理由でしたが、何よりも人と話すことを苦手としているのでいろんな思いが積み重なり、不安な気持ちでいっぱいでした。

そしていよいよ、ボランティアをする日を迎えました。私ともう一人の中学生二人で、活動することになりました。私は、利用者さんの髪の毛を乾かしたり、利用者さんとお話したり、食事を配膳したりしました。もう一人の中学生の方は、利用者さんとよくお話をしていました。その姿を見て、素直にすごいな、負けていけないなと思いました。

その中で一番印象に残っている活動は、利用者さんの髪の毛を乾かしたとお話をしたことです。髪の毛を乾かしたことが印象に残っている大きな理由は、それが最初に行く活動だったからです。自分以外の人髪の毛を乾かすなんて全くないのでどうすればいい

のか解りきっていなかったり、何より傷をつけないか心配でした。けれど、まずは相手の方が不安にならないよう「おはようございます」と声をかけるようにしていました。

利用者さんとお話をしたことが印象に残っている理由は、自分が祖母や祖父と離れて暮らしていて、高齢の方と話す機会があまりないからです。利用者さんの中には、障害を持っていてもいたのでうまくコミュニケーションを取れるか心配でした。ですが、話してみるとたくさんの方が笑ってくれたり、興味を持っていてくれるのが伝わってきてとても嬉しかったです。話す時は、視線を合わせたり、大きな声で話したり、会話が長くように工夫することもできたのでよかったです。

私は、ボランティア活動を通して、思ったこと、気づいたことがたくさんありました。自分の中で一番嬉しかったのは、利用者さんから「ありがとう」の言葉をもたらしたことです。いつも何気なく使う言葉ですが、この言葉をもらうことがどんなに嬉しいことなのか気づくことができました。

もう一つの気付きは、ボランティア活動を行う者としての在り方です。

「ボランティアは、単に与えるということではなく、むしろ学びあい育てあう社会連帯の活動、相互理解の関係を作り出す活動である。」

ボランティア活動をする前にこの文を目にした時は、正直どういふことなのか分かりませんでした。ですが、実際に活動してみると「してあげる」ではなく「させてもらう」という気持ちを持つことが大切だと感じました。ボランティア活動を通して、いろんなことをお手伝いするかわりに、私たちも人間としての在り方を学ぶことができるからです。このことを、ボランティア活動をしたことがある人、したことがない人に限らずいろんな人に知ってほしいと思いました。

そして、ボランティア活動を通しての一番の気付きは、何をするにもコミュニケーションを取らなければならぬということでした。

利用者さんの髪の毛を乾かす時も、食事を配膳する時も、全てにおいてコミュニケーションをしなければ成り立たないことに気付きました。私は、コミュニケーションを取るのが苦手で、早くその場から逃げ出したいと思ってしまふことがよくあります。ですが、ボランティア活動をしている時はうまく話せているかなと思うだけで、苦痛とは感じませんでした。それは、利用者さんが自分の気持ちを盛大に表してくれていることに気付くことができたからだだと思います。なので、普段から相手がどう思っているのか簡単に考えるのではなく、しっかりと向き合っているのか簡単に考えるのではなく、コミュニケーションを取る中で見つけていくべきだと思いました。

ボランティア活動を通して、私はどんな人にも本当の自分をさらけ出せるようになりたいと思いました。私は、この目標を一瞬も忘れることなくボランティア活動で学んだことをこれから活かしていきたいです。

【佳作】

私ができること

桜小学校 五年 伊藤 優衣



私は、四年生のころに、福祉実せん教室を行いました。目をかくして、学校をまわったり、点字について知ったり、手話などを体験しました。ガイド役で友達がいたけれど、どこに自分がいるのかが分からなくなりました。目が見えない人は、ガイドがいなくて、かわりに白杖を持って歩きますが、とても怖いし不安なんだということが分かりました。それなのに、この生活を毎日続けていることを考えると、とても大変だと思いました。

点字は、目が見えない人のために作られた文字です。

この点字のおかげで、目が見えない人も手で文字を読むことができることを知りました。体験では点字をうつのが、少しむずかしかったです。

次に体験したのは、手話です。私は、ドラマで手話を知りました。手話は、耳が聞こえにくい人が会話をする時に使います。手話では、自分の名前を練習したり、ひらがなをやりました。手話で会話をするのは、まず手話を覚えなくてはいけないので、とてもむずかしいことだと分かりました。

福祉体験を行い、体が不自由な人の生活を知ることができました。でもどれもむずかしく、不安だらけで、毎日の生活がとても大変だと分かりました。だから少しでも、手伝いたいという気持ちになりました。そのためには、日ごろからこまっっている人を見かけたら、声をかけていきたいです。

私は体験を通じて、こわくて、不安もとても多くありました。くらす人々みんなが(ふ)つうの(く)らしができる(し)あわせには、まだまだ時間もかかるのではないかと(し)思いました。くらしやすく、使いやすく、分かりやすくするためには、お金もかかります。私にできることはまだ小さなことです。たかさんの人がまず小さなことから始めれば、きつといつか大きな目標を達成できると思います。私たちが今できることを考えて、行動にうつして、実せんしていきたいと強く思いました。

【佳作】

「量より質」

日の出小学校 六年 橋野 凜佳子

私は、友達にさそわれて、福祉体験に行きました。施設の名前は「グループホーム森津」です。福祉体験に行った理由は、介護の仕事はどれだけ大変なのか、そのなかで楽しい事は何かを聞いたり、実際に見に行ってみたからです。

体験に行った時は、おやつ時間で、入居者の方たちは、それぞれちがうお茶やゼリーを食べていました。理由は、むせたり、咳き込んだりするから、とろみや、入っている物がちがうと職員の方が教えてくれました。細かいところでも気が付く職員の方は、すごいと思います。友達3人で一緒に「黒ひげ危機一髪」もやりました。入居者の方たちも入り、一緒にやると、とても楽しくてみんな笑っていました。私は、老人ホームに行った事が無く、少し心配でしたが、行って良かったと思います。またその後、職員の方たちが手作りのしたかるたをやりました。職員の方からは、「ちよつと手加減をしてあげてね。」

と言われたので、ヒントもいれながらやりました。最後の一枚になったとき、取られてしまったけれど、とても楽しかったです。部屋には、その他にもたくさん

のおもちやが置いてありました。友達のお母さんが、「遊ぶことも運動になるし、いっぱい笑ったほうが体にいいから、おもちやがたくさん置いてあるんだよ。」と教えてくれました。

その後、施設を見学させてもらいました。トイレやお風呂を見たら、広くて最初はびっくりしたけれど、よく考えたら、車いすの人もいて、お手伝いしないといけない人もいるから、広くなっているという事が、分かりました。お風呂は、浴槽の横の部分がスライドできて、なぜだか分からなかったけれど、職員さんから、

「足が上げられない人もいるから、下げられるようになっていてるんだよ。」

と教えてもらいました。脱衣所には、洗たく機が2つあり、乾燥機もありました。

私が、楽しい事と大変な事どちらの方が多いですか、と聞いたら、友達のお母さんから、

「大変なのが八割、楽しいことが二割だけれど、その二割が深いから、やっていけるんだ。」

と教えてくれました。楽しい事は量より質なんだなと思えました。一番つらい時はどんな時ですか、と聞く

と、「一番つらい時は、人が亡くなってしまった時、送り出す時かな。家族にも伝えなくてはならないし、一緒にいた人だからとても悲しい。」

と教えてくれました。

ろうかには、これまで施設でやったイベントの写真がはってありました。そこには、室内のイベント以外にも、屋外でバーベキューをしている写真もあり、みんな楽しそうでした。私は、最初、この施設には、イベントがたくさんありそうだなと思っていたけれど、まさか外でやるイベントもあったとは、思いませんでした。中庭もあっていいなと思いました。

私は、介護の仕事は、大変そうとだけ思っていたけれど、大変な事だけではないと気が付きました。楽しいこともあるという事が分かりました。私は、もつと

【佳作】

見えるしよがい見えなししよがい

十四山東部小学校 四年 木村 朱杏



わたしは、今までしよがいのある人と身近で関わったことがありませんが見かけたことはありません。町の中でも目の見えなしの人のために地面に点字ブロック

があり、丸いけいこくブロックと細長いゆう道ブロックでこの先の道を案内しています。ほかにも音声信号があります。音声信号で青になったことを知らせています。また、目のふ自由な人は歩くために白いつえやもうどう犬で歩いている人がいることも知っています。

わたしのおばあちゃんは目がふ自由なわけではなけれど、病気で左目のし野がかけてしまい左目の見えるはんいがせまくなってしまうました。ほかの目の病気もまざり同じ色の物どうしも見分けがつかなくなっています。なので、わたしが小さいころ、歯医者についてきてくれて白い台に白い紙コップをおいてくれようとしたとき、上手におけず水をこぼしてしまったことがあります。ほかにもイオンの階だんでうす暗かったため、だんさが分からなくなってこけてしまったこともあります。

おばあちゃんは見にくいことが自分で分かっているから、見にくい所は行かないようにしているし、夏は光がまぶしいから外に出るときはサングラスをかけているし、夜はなるべく外に出ないようにしているそうです。わたしといっしょに買い物に行ったときもサングラスを見ていて、サングラスがかけてあるたなにサングラスをもどそうとしたとき、あなが見えなくてわたしに聞いてきたこともありません。わたしは、かわりにもどしてあげました。それから、おばあちゃんを見ていて、こまっついそうなときには助けてあげて

います。同じ色の物どうしでなにかをおきたいときおいてあげてるし、だんさがあつたら教えてあげていきます。そうすると、おばあちゃんはいつもうれいそうに「ありがとう」と言ってくれます。おばあちゃんは助かるから「ありがとう」と言ってくれるし、わたしも言ってくれるとうれしくなるからまた助けてあげたいと思います。

町の中には、しょうがいのある人だけではなく、見ただけでは分かりにくいけど助けてほしい人もいます。助けてほしい人の中にはヘルプマークをつけている人もいますが、つけてない人もいます。わたしは、どんな人でもこまっついいる人がいたら、「大丈夫ですか、何かお手伝いしましょうか。」と声をかけて助けてあげたいと思います。

